大橋さん，さようなら

村　上　英　治

大橋さんと呼んでも今はもう声は返ってこない。53才の若さで，ぼくたちに先んじて君は逝った。痛恨きわまりない。

有能な頭のきれる人だった。

専門の領域に限らず，いろんなことをほんとによく知っていた。たとえ知らないことであっても，ちゃんと知っていると言い張り，もののみごとに相手を説得させる術をも心得ていた。しかもそうして納得させられた側にいやな思いをさせることなど一度もなく，いつもその場に爽やかな余韻をただよわせていた。心暖かな君の人柄のせいからなのだろう。笑うときエクボの妙に心に残る君だった。

指導精神旺盛な人だった。

専門の社会心理学，対人認知から印象形成へ，そして帰属理論へと，その研究の展開については，ここで改めて言挙げする必要もない。君とその仲間の積み重ねてきた研究業績が何よりも雄弁にそれを物語る。ただその研究生活の出発の時期，今からちょうど30年も前になる，君と共に助手をしていた時代，さらに君が大学院に進んだ頃，君と一緒に教室を出たほとんどそのたびごと，酒汲みかわした街の屋台で，執拗なまでにハイダーの三人場のバランス理論を私に熱っぽく語ってくれたことを私は忘れられない。私を一緒にその研究仲間にまきこみたかった君の熱意のほとばしりであろうか。不幸にして私自身をその線にはのせきれなかったけれど，多くの若い人々を共鳴させ，小嶋さんをして後に大橋部屋などとよばせるようになった研究グループとして発展させるようになり，多くの俊秀を学界に送り出してきた，君の指導力のすばらしさを思う。

余技として，趣味としてよく知られている囲碁に対する君自身の打込み，技倆もさることながら，下手（したて）に対する君の囲碁指導への情熱はまたすさまじいものがあった。四本柱をいつでもおろしてやるからチャレンジしてこいとのここ数年来の君の促しに，多忙にかこつけ十分対応しきれなかったことが今となっては悔まれる。たたかいの真最中にでも，石をならべなおして実践指導の範を示してくれる君だった。奥さままた，その指導精神の直接の対象となって特訓をうけられ，腕をあげられたときく。福井の君の新宅を訪れた折，私に奥さまとの対局をすすめ，きびしい批判を浴びせたことなどもまた忘れられない。

自分の行動にきびしく責任をもつ人だった。

教室会議，教授会での君の発言は，するどく，きびしく，時として同席する連中に，そこまでもと思わせることもなかったとはいえない。真実を真実として，君は信念をもって訴えつづけてきた。あいまいな妥協を絶対にうけつけない君だった。しかしそれには常に責任が伴なっていた。福井大学から，私とまったく同時期にこの教育学部へ移って，ただちにおそった大学紛争の嵐の中で，これが大学改革への起爆するエネルギーとはなり得ても，持続するエネルギーとはなり得ないであろうことを共に慨歎しながら，ともすれば無責任にも突っ走りがちな私を，私より若い君がひきとめてくれたことも少なくない。実際に行動することはよりきびしい責任を伴うものであることを，君はこうして身をもって教えてくれたのだと思う。

いろんな面で自分を御することのできた君のきびしい決断に私はまた啓発されたことがある。6年前，ロスアンジェルスに家族ごと滞在していた君のもとへ，訪英の途次立ちよった折，自動車ぎらいの君が，アメリカ生活の必要に迫られて取得した免許のおかげで，私は大変お世話になることが出来た。しかし帰国後，君はその免許証を淡々と破棄した。たとえ乗らなくっとも更新する人がほとんどであるときくのに，日本ではもう乗るつもりはない，持ってる必要はないからとカラカラと笑いとばす君だった。

人生計画をたてることの着実な人だった。

かねがね10年周期説というのは君の持論としてよくきかされていた。そんなにうまく人生の折り目，切り目がくるわけでもないと思われるのに，君はたしかにその線に沿って歩んできた。昭和24年，名古屋大学に入学してから研学10年，新進気鋭の学徒として昭和34年，福井大学に赴任した。それからまた10年，君は期待をになって昭和44年，母校に迎えられることとなった。その後は10年きっかりとはいえないけれど，8年たって，昭和52年，ＵＣＬＡへの留学は，また君に国際的研究者としての第一歩をふみ出させる契機を生み出した。そしてその後6年，今度は10年周期説での次のエポックが来るのをまた

ず，君は幽明境を異にした。どこでその計算が狂ったのだろうか。名古屋大学着任以降のハードなスケジュールが，こうして2年ずつ君の持説を縮めることになったのかとも思う。

ふとまたしかし考える。小さな世帯でありながら，不幸なことに私ども教育心理学教室は，昭和39年に白石一誠教授を，また昭和47年に続有恒教授を，そしてこの昭和58年君をといった形で，現職教授を，それこそほとんど10年周期で失っている。まったく偶然のことに違いはないけれど，こんなところにまで君の10年周期説が位置づけられるとしたならば，それはあまりにも厳しく，切ない。

ほんとに生きつづけてほしかった。すばらしい仕事をなおも残してほしかった。多くの人々にもっともっと君の暖かさを伝えてほしかった。その君は今はもういない。哀しみこれに過ぎるものはない。

心から君の死を悼んで

さようなら

（昭和58年11月23日　学部葬の夜に）